

第33回鹿児島栄養代謝研究会抄録

鹿児島栄養代謝研究会
(代表世話人：高松 英夫教授)

日時：平成18年3月3日（金曜日） 18：30～ 会場：鹿児島東急ホテル2F「桜島の間」

特別講演

座長 鹿児島大学病院 院長 高松 英夫

『小児肥満とメタボリックシンドローム』

神奈川県予防医学協会 朝山光太郎

一般演題

座長 鹿児島厚生連病院 内科部長 今村也寸志

(1) CVC感染症防止の取り組み

阿久根市民病院 NST¹, 薬剤科², 消化器病センター³, ICT⁴

岩下佳敬^{1,2}, 堀之内圭子¹, 木場雄一¹, 飯野 聡¹,
池田信一¹, 神田大輔¹, 田中理恵子¹, 柏木千代子¹,
中目和彦^{1,3}, 佐多照正^{2,4}, 石田和久², 田辺 元³

【はじめに】

阿久根市民病院では、質の高い医療の提供のためにNST, ICTを稼動し、チーム医療を推進している。NST, ICTの目標としてCVC感染症の減少が挙げられる。CVC感染症予防のためには、高カロリー輸液の無菌調製や、より清潔なルートの選択が有効とされている。そのため、当院においてはクローズドシステムであるシュアプラグ輸液セットの採用と、すべての高カロリー輸液無菌調製する工夫を行った。

【方法】

シュアプラグ輸液セット使用前6ヶ月のカテーテル感染症の変化を調査した。シュアプラグ輸液セットを使用した感想について看護師に意見聴取を行った。今まで使用していたルート（輸液セットとフィルター、三方活栓を組み合わせたもの）とシュアプラグ輸液セットの価格を調査比較した。時間外や祝祭日の無菌調製の実施を開始するために製剤の見直しを行った。シリンジタイプのビタミン剤や微量元素製剤等に変更した。総合ビタミン剤含有高カロリー輸液とシリンジ製剤への変更に伴う経済的影響について調査を行った。

【結果】

カテーテル感染症はシュアプラグ導入前、6.4%であったが、導入後1.5%と減少傾向が認められた。シュ

アプラグ輸液セットは、当院が使用していたルートと比較して1セットあたり245円の購入額増加が懸念された。実際に使用している看護師の意見は、好意的なものが多かった。薬剤変更の工夫により、土・日祝祭日も無菌調製を実施し、件数の増加傾向が認められた。薬剤の変更により全体的な購入額は増加するが、病院負担額は減少していた。

【考察】

シュアプラグ輸液セットへの変更により、当院においては若干の購入費の増加がみられたが、カテーテル感染症を減少させることができた。さらに使用する看護師からの評価も高いため、患者と病院にとってメリットがあると考えられる。総合ビタミン剤含有高カロリー輸液と、シリンジ製剤の採用により無菌調製の効率を図り、平日のみの無菌調製を土・日祝祭日まで拡大できた。このことは、感染症と診療報酬の面からも有用であったと考えられる。

(2) 小児外科疾患術後に経口摂取障害を来した2例

鹿児島大学病院小児外科, 同院長¹⁾,

鹿児島大学医学部保健学科 臨床作業療法学²⁾

田原博幸, 下野隆一, 林田良啓, 新山 新, 松田博光,
武藤 充, 町頭成郎, 高松英夫¹⁾, 幸福圭子²⁾

【はじめに】

小児外科疾患の中には、経口摂取能力を獲得する時期に長期にわたり経口摂取ができず、その結果摂食障害を来す症例がある。現在、摂食障害に対し、経口訓練の作業療法を行いながら経過をみている2例を経験したので報告する。

【症例】

症例1, 4歳8か月女児。Hypogenesis of gangliaの診断で栄養管理を行うも長期にわたり経口摂取ができなかった。現在、在宅静脈栄養で管理をしながら、経口訓練を行っている。最初、重湯は口にしないものの、その他の食物には一切興味を示さなかったため、遊びの中で食物を口に運ぶことから開始した。また食物や食事に興味を持つように、母親と一緒に料理をし、一緒に食事をす

る様にした。現在、口に入れたものを嚥下するまでには至っていないが、口に運ぶ食物が増え、食べる楽しさを理解するようになった。症例2, 3歳3か月男児。A型食道閉鎖症の診断で生直後に胃瘻を造設した。生後4か月時に食道食道端端吻合術を行い、生後7か月時にNissen法による噴門形成術を行った。経腸栄養主体のまま退院となり、経口摂取訓練は外来で経過を見ながら行っていった。退院時、味付き乾麺は食べるものの、ご飯類は嚥下しなかった。このため、親指大のおにぎりなど食材を小さくし食べやすくしたところ、次第に改善がみられ、食欲にむらが見られるものの、経口摂取量が増えてきている。